

●二人で味わう古典和歌 (119)

来むと言ふも来ぬときあるを来じと言ふを来むとは待たじ来じと言ふものを 大伴坂上郎女

『万葉集』巻四「相聞」の一首。

「来るよと言ったって来ないときがあるあなただもの、来ないと言ってるのを、もしや来るかも、なんて待ったりはしないわ。だって来ないと言ってるんだもの」。

来るとか来ないとか、はあー、何言ってるの。と思いながらつついつい何度も読んでしまう。そのうち声に出して読んでしまう。来む・来ぬ・来じ・来む・来じ、と「来」がくるくる入れ替わる早口言葉みたいなおもしろさ。それでいて、だんだん切なくなる。拗ねているように見せかけながら、じつは待つ心をひそかに訴えているのだ。こんな歌をもらったら、にんまりして男も会いにゆくだろう（空氣が読める男なら）。

大伴坂上郎女は、旅人の異母妹で家持の叔母。十代でかなり年長の穂積皇子に嫁ぎ、その没後、大伴宿奈麻呂と



結婚して、家持の妻となる大嬢を生んでいる。

この歌は、藤原麻呂（不比等の子）との贈答歌のなかの一首。穂積皇子亡きあと、宿奈麻呂に嫁ぐまでの時期で、おそらく二十代前半だろうと推察される。

麻呂からの贈歌のなかには、こんな歌。

むし衾なごやが下に伏せれども妹とし寝ねば肌し寒しも

「温かい布団にくるまって寝ているけれど、あなたとの共寝ではないので、寒くて仕方がない」。

上句を生かした肌感覚の新鮮さはあるものの、郎女の才気にはとうてい及ばない。待つ女の切ない心情を滲ませつつ、決して男にへりくだりはしない、艶やかでしたたかな、そして機知に富んだ郎女の返歌の手腕に驚く。

郎女はこののち、兄・旅人の死後、まだ少年だった家持の後見を果たしながら大伴家を支え、上級貴族・大伴家の文学サロンの中心的存在となる。少年・家持の歌の手ほどきをしたのも郎女である。『万葉集』の蔭の立役者は、あるいはこの人なのかもしれない。

（小島ゆかり）